

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592479

研究課題名(和文) 乳児の泣きへの見極めを促す母親支援ガイドラインの開発

研究課題名(英文) Development of guideline to support mother's ability to distinguish the meaning of infant's cries

研究代表者

田淵 紀子(TABUCHI, Noriko)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号：70163657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、育児中の母親を支援するためのプログラムとして、乳児の泣きへの見極めを促すガイドラインの開発を目的とした研究である。泣きの見極め過程を提示したガイドラインを作成するにあたり、これまでに母親がいつ頃どのように乳児の泣きのみきわめができていくのか、文献およびこれまでの調査データの分析結果より明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop a guideline for mothers to enable them to distinguish the meaning of the various cries of infants.

In order to determine when and how a mother could understand the meaning of an infant's cries, data was analyzed over a year, and a guideline was developed a view to ultimately developing a support program for mothers.

研究分野：母性看護・助産学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：泣き 乳児 母親 育児支援 ガイドライン

1. 研究開始当初の背景

乳児の“泣き”は産声に始まり、その後数カ月間は、乳児の内的情報(空腹、不快、甘え等)を伝達するもっとも顕著な行動であり、言葉を獲得する以前の時期においては、自らのニーズを伝達する重要な手段の一つである。しかし、出生後2~3か月の間は、乳児の咽頭・口蓋の解剖学的発達の特徴上、泣き声から乳児のニーズを判別することは難しい。特に育児が初めての母親にとっては、乳児のニーズを適切に判断することは難しい。乳児はニーズが満たされると泣き止むが、満たされなければ泣き続けることになる。母親は、乳児がなぜ泣くのか、その意味が分からず、泣き止まない児を前に自分の無力さを感じるとともに、育児不安を募らせることとなりうる。最近、問題となっている子どもの虐待の原因に、児が泣き止まないことによる感情抑制不足があげられている。児の泣き声は、母親を引き寄せるものであるが、時にストレス源ともなり得る。乳児の泣きに対して困難感や不安を増大させることは、その後の育児ノイローゼや虐待などの危険性につながる可能性を秘めており、このような状況を予知し、母親の育児困難感や不安軽減に貢献できる育児支援プログラムの開発が急務である。そこで、母親が児の泣きの意味が何かを見極めていく過程が明らかにし、それを提示することにより、母親が自分自身の段階を把握でき、余計な不安を抱かずに済むのではないかと考え、本研究では、母親自身が泣きへの見極めの段階を知ることのできるガイドラインの作成に着手しようと考えた。

2. 研究の目的

(1) 母親がいつ頃、どのように乳児の泣きを見極めができていくのかを明らかにする。

(2) 母親自身が活用できる乳児の泣きを見極めに関するガイドラインを作成する。

3. 研究の方法

(1) 目的1. 「母親がいつ頃、どのように乳児の泣きを見極めができていくのかを明らかにする。」に対して

これまでに行ってきた研究代表者らの縦断的な調査データを整理・分析し、泣きを見極めに関する情報を抽出する。

いつ頃、どのような過程をたどるのかをモデルとしてあらわす。

(2) 目的2. 「母親自身が活用できる乳児の泣きを見極めに関するガイドラインを作成する。」に対して

ガイドライン作成のために、文献学習や資料収集を行う(既存のガイドライン等を参考にガイドラインの作成過程を学習する)。

文献学習およびこれまでの調査結果をもとに、泣きを見極めのモデル化を行う。

母親が活用できるガイドラインの試作版を作成する。

4. 研究成果

研究代表者らが行ってきたこれまでの縦断的な調査データを整理・分析し、以下の結果を得た。調査は北陸地方の病産院にて正期産児を出産した母親763名を対象に、生後1ヶ月、生後4~5ヶ月、生後1年時に縦断的に自己記入式質問紙調査を行ったものである。以下に述べる結果は、生後1年時の調査回答のあった251名の母親の分析結果である。

(1) 生後1年児をもつ母親が児の泣きに最も困難を感じた時期

出生時から生後1年を振り返り、児の泣きに対して、最も困難に感じた時期は、生後1ヶ月が最も多く、出生後から2~3ヶ月頃までが、初産婦、経産婦ともに多かった(図1)。

(2) 生後1年児をもつ母親が児の泣きの意味が分かるようになった時期

泣きの意味が分かるようになった時期は、初産婦、経産婦ともに個人差が大きく、経産婦では出生直後からと回答している母親が最も多かったが、初産婦は経産婦より遅い傾向にあり、7～8ヶ月頃と回答した母親が最も多かった(図2)。

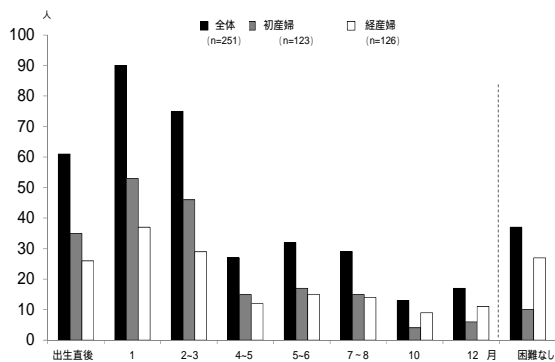


図1. 児の泣きにもっとも困難を感じた時期 (重複回答)

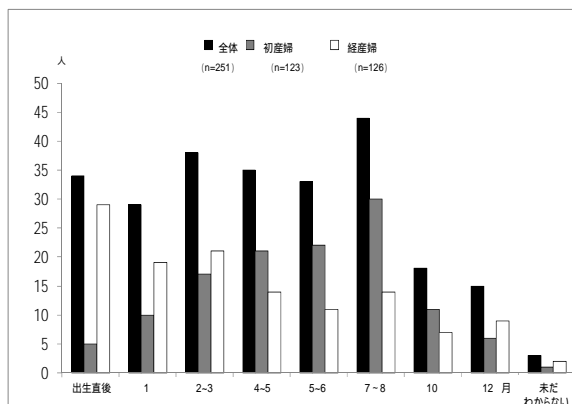


図2. 泣きの意味が分かるようになった時期

(3) 泣きの見極め過程

以上の結果からわかるように、乳児の泣きの意味の見極めが出生後から2～3ヶ月頃までは極めて困難であることや、泣きの意味が判明し、困難を感じなくなるまでには半年以上(7～8ヶ月頃)を要し、中には生後1年を経ても乳児の泣きに戸惑う母親が2割程度存在していたことが明らかとなった。このことは、生後1年頃でもすべての“泣き”に対して、見極められるというわけではなく、時には泣きの意味が分からないこともある

ということを示すものである。これらの結果は、育児中の母親を支援していくうえで重要な示唆が得られたと考える。

(4) ガイドライン試作版に向けてと今後の展望

今回の示唆は、出生直後から生後一年まで縦断的に追跡した母親からのデータをもとに分析したものであり、とても貴重である。母親が児の泣きの意味が分かるようになっていく過程を母親が見てわかりやすいものとなるよう検討を続けた。既存の資料をもとに試作を続けている。このモデル化により、母親がいつの時期は、泣きの意味が分からなくても自分だけがわからないのではなく、多くの母親も同じように経験していることだとわかることで安心につながると思われる。また、いつ頃になると、泣きの意味が分かるようになるという見通しが立てやすくなり、泣きに対しての戸惑いや困難さから引き起こされる育児不安の解消、予防に貢献できるものとする。

今後、地域で活動している助産師の協力のもと、泣きの見極め過程を提示したガイドラインが、母親が実際に活用できるものになっているか、ガイドラインの提示方法、時期、および追跡方法などを検討し、育児支援プログラム案を作成し、ガイドラインの有効性を検証する予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

Noriko Tabuchi, Keiko Shimada, Yukie Kameda, Relationship between maternal distress associated with 1-year-old infant crying. Journal of the Tsuruna Health Science Society, Kanazawa University, 査読有、35、2011、45-52.

[学会発表](計 1 件)

Noriko Tabuchi, Keiko Shimada, Kayono Konishi, The relationship between monitoring of neonates' sweating in relation to activity and interaction with mothers, ICM Prague 2014, 2014

年 6 月 3 日 (予定), Prague Congress
Centre (Czech)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田淵 紀子 (TABUCHI, Noriko)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号 : 7 0 1 6 3 6 5 7

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

島田 啓子 (SHIMADA, Keiko)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号 : 6 0 1 1 5 2 4 3

亀田 幸枝 (KAMEDA, Yukie)

金沢大学・保健学系・准教授

研究者番号 : 4 0 3 1 3 6 7 1

関塚 真美 (SEKIZUKA, Naomi)

金沢大学・保健学系・助教

研究者番号 : 6 0 3 3 4 7 8 6

藤田 景子 (FUJITA, Keiko)

金沢大学・保健学系・助教

研究者番号 : 6 0 5 8 7 4 1 8

(平成 24 年度より連携研究者)

小西 佳世乃 (KONISHI, Kayono)

金沢大学・保健学系・助教

研究者番号 : 8 0 7 0 8 4 7 0

(平成 25 年度より連携研究者)